

報告

静岡県掛川市天然寺ゲイスベルト・ヘンミイ墓 －客死したオランダ商館長の墓地－

田 中 裕 介

はじめに

静岡県掛川市の掛川城大手門に近い古刹泉洞山天然寺の脇に、西洋文字のきざまれた石造物がある。現在は表面が風化し文字は読み取りにくいだが、日差しをまてば今でも明瞭にアルファベットの文字を読みとることができる。かたわらには1925（大正14）年に建てられた記念碑が立っている。この不思議な石造物は18世紀末江戸参府の帰途、東海道の遠江国掛川宿において客死した長崎オランダ商館長ゲイスベルト・ヘンミイの墓碑である。2006（平成18）年2月に掛川市指定文化財（建造物）に指定されている。

本稿は西暦1798年6月9日＝寛政10年4月25日に旅先の遠州掛川に埋葬された長崎オランダ商館長ゲイスベルト・ヘンミイの墓所を紹介し、その埋葬・墓碑及び葬儀と供養の実態をまとめて、当時の日本におけるオランダ人墓制の特徴を論じ、日本国内で外国人がどのように扱われたのかという問題を考える材料として、墓碑と埋葬の側面からヘンミイ墓をとりあげるものである。

調査の経緯

ここでは私事になるが筆者がヘンミイ墓に遭遇するいきさつに触れ、そこからこの墓の研究をめぐる経緯をたどっていきたい。

筆者は2012（平成24）年長崎市に所在する悟真寺国際墓地の調査を行った。悟真寺はキリシタン時代の長崎の郊外にあたる稲佐に1609（寛永14）年に設けられた浄土宗の寺院である¹。悟真寺には江戸時代から現代にいたるまでの唐人・中国人墓、出島商館のオランダ人墓や幕末のロシア人墓などの鎖国時代から開国初期の外国人墓地が残されている²。はじめ筆者の関心は唐人墓地にあり、その中に近世初頭のキリシタン墓が存在するかいなか検討するために赴いた。たまたまオランダ人墓地をおとずれたとき、そこに扁平形板状伏碑と筆者らが命名した近世初期のキリシタン墓碑³と、まったく同一形式の墓碑がオランダ人の墓碑として18世紀の末期から19世紀にかけて用いられていることを知った。一見偶然の一致あるいは考古学資料に時折みられる「他人の空似」ではないかとも思ったが、その墓碑形式がオランダ人のみでなく、幕末期になるとオランダ人とは宗教・民族・国家の異なるギリシャ正教のロシア人の墓碑に使用されていた。さらに同じ長崎市内の坂本国際墓地にある明治初期のカトリックのフランス人兵士の墓碑としても利用されていることに気づいた。このような異なる民族や国家あるいは宗教をこえて用い

られるという共通性からみて、この墓碑形式は出身地の埋葬習俗を持ち込んだものではなく、当時の幕府の政策的誘導によって設定されたのではないかという考えを持つに至った。

そこで関心をもって江戸時代のオランダ人墓地を調べてみると、同一形式のオランダ人墓碑が、長崎以外で唯一静岡県にあることを知った。それがこのヘンミイ墓である。そこで当時静岡県伊豆の国市教育委員会の職員であった山本哲也氏に同行を願い、2013(平成25)年10月12日土曜日に現地をおとずれ、墓碑の本体を計測し実測図を作成した。その際墓所の所在する天然寺さんにご挨拶に上がると、突然訪れたにもかかわらず、ご住職の奥様にくわしいお話を伺いし、ヘンミイの位牌と残された史料を拝見するというご好意をいただいた。また調査に当たっては事前に掛川市教育委員会社会教育課文化財係岡本佳通氏よりヘンミイ墓について指定時の資料の提供をえた。

1、ゲイスベルト・ヘンミイ墓の研究史

掛川に客死したヘンミイの死と葬儀は西暦1798年6月寛政10年4月のことである。オランダ商館の一行が掛川宿を離れる際に墓碑の発注が行われているので、墓碑が完成して設置されたのは葬式後間もなくと推定される。掛川宿は東海道でも繁栄した城下町であり、多くの旅客が往来し、この墓所は物見の評判を集めたらしく、享和4年正月(1804年)に刊行された曲亭馬琴の旅行雑記『葦笠雨談』(後に『著作堂一夕話』と改題)に「紅毛人の墓」と題する記事とのちに紹介する挿絵が描かれている⁴。尾張藩の国学者鈴木^{あきら} 腹(1764~1837)のノートをまとめた『離屋雑纂』⁵や、1805(文化2)年に掛川藩が編纂した『掛川誌稿』⁶にも死亡埋葬の記録があり、江戸時代にはこの墓地の所在と由緒は関係者のみならず庶民にまで知られ、「当時の旅人の好奇心に駆られて参詣するものの意外に多かったのであろうか?」という沼田次郎のつぶやき⁷に同感するものである。幕末まではオランダ商館から年額2両の香花料が天然寺に納められ、商館長の江戸参府の際には墓参が行われていたという。

明治維新後になると、「維新後全く荒廃し青苔深く鎖して人の申うものなく、頗る寂寥の観に堪えず。」と鈴木正鍊が嘆いたように人々の関心はうすれていった。1916(大正15)年鈴木は「天然寺蘭人の墓碑」を書いてはじめてヘンミイ墓を学会に紹介した⁸。そこで鈴木は墓碑のスケッチ(図3)と法量の計測を記載するとともに、オランダ語碑文とその訳文ならびに天然寺所蔵の史料の現地調査をもとに、ヘンミイの死と埋葬の経緯、その後の葬式供養について概要をまとめ、墓碑についても「長崎にある蘭人の墓碑と同じく当時の遺物たるを疑うべからず」とのべた。短い極めて要を得た報告で、今日でもまず第一に参照されるべき文献である。さらに1954(昭和29)年には若森英雄が、ヘンミイとその墓所のその後について情報をくわえている⁹。

その後1960年代にオランダ商館長としてのゲイスベルト・ヘンミイを研究した庄司三男¹⁰が、ヘンミイの埋葬とその後の墓の維持がどのように行われたかという論点からオランダ側史料を中心にまとめている¹¹。この庄司の研究に対応して天然寺所蔵の関連資料を紹介したのが沼田次

郎の報告である¹²。ここにおいて文献史料の方面からの基礎的な研究はととのったが、その後は1990年代に宮永孝^{13・14}が、江戸時代のオランダ人研究の一環としてふれているのみで、注目されることは少なかったが、21世紀になって文化財としての歴史的価値が見直され掛川市指定文化財となっている。

以上の研究によって客死したオランダ商館長ゲイスベルト・ヘンミイの生涯と、死の事情と葬儀から墓碑建設、その後の供養の様子が蘭文・和文双方の研究から明らかになっている。

2、天然寺とゲイスベルト・ヘンミイ

静岡県掛川市浄土宗泉洞山天然寺

ヘンミイが葬られた天然寺は現在の掛川市仁藤町5-5に所在する。明応3(1494)年秀誉上人開山と伝え、掛川城の大手門近くに位置し、江戸時代には歴代の掛川藩主から庇護を受け、朝鮮通信使の官人宿舎としても利用されていた浄土宗知恩院派の古刹である¹⁵。

ゲイスベルト・ヘンミイとその死

庄司三男の研究¹⁶によれば Gijsbert Hemmij は1747年6月16日にオランダの植民地であった南アフリカの喜望峰で生まれ、1792年11月13日＝寛政4年9月30日長崎出島のオランダ商館長に着任し、1798年6月8日＝寛政10年4月24日に江戸参府の帰路、病が悪化し掛川宿本陣で死去した。ヘンミイは1794(寛政6)年と1798(寛政10)年の二度江戸参府をおこなっている。彼が亡くなったのはその二度目の江戸参府の帰途である。ヘンミイのオランダ商館長としての事績は庄司論文にゆずり、ここでは彼の死の経緯に触れておきたい。



写真1 ヘンミイ墓全景

1798(寛政10)年、江戸参府のためヘンミイ一行は長崎奉行所役人に伴われて、寛政10年1月長崎出島を発し、同年3月15日には將軍家斉に謁見し、その帰路4月22日掛川宿で病気となり、投宿していた掛川宿の本陣にて24日ヘンミイは病死した。翌25日長崎奉行所の依頼により天然寺で葬式が行われ葬られたとされる。彼の墓碑が天然寺に残されている(写真1・2)。



写真2 ヘンミイ墓の現状

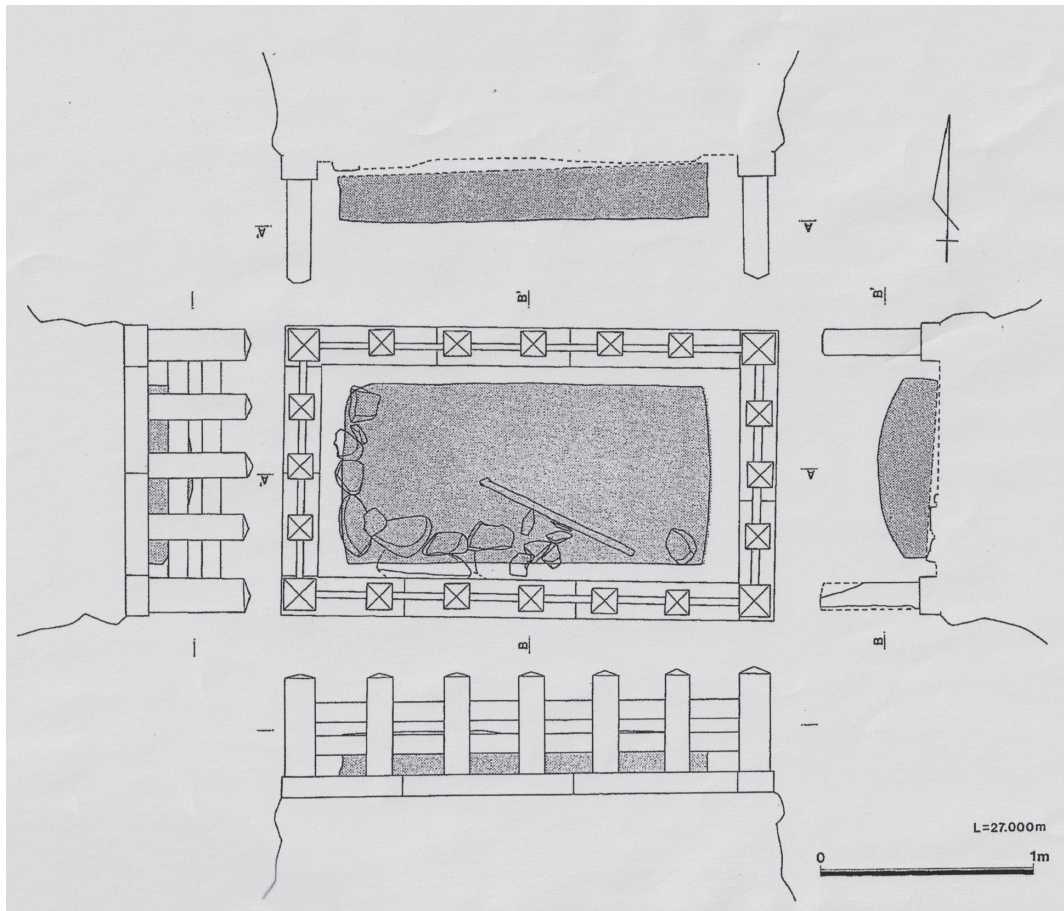


図1 ヘンミ墓所の全体図 (掛川市提供)

3、ヘンミ墓所の報告

玉垣

墓所の位置は境内の内というよりその外側に位置しており、天然寺の門をくぐることなく見ることができる¹⁷。墓碑の全体は現在円礫3段積み of 石垣を積んだ基壇の上に置かれ、周囲には石製の玉垣が巡っている(図1・写真1・2)。ヘンミ墓碑が作られて4年後の1802(享和2)年に旅游の途中に訪れた曲亭馬琴は、「紅毛人の墓」と題して「遠州掛河、転念寺(=天然寺)本堂の前、西の方に紅毛人の墓あり。高さ二尺ばかり、幅五尺に二尺四五寸もあるべし。上は蒲鋒形にして長櫃の蓋を伏せたのごとし。四方に石垣をして施主大通辞某の姓名を刻す。墓誌は阿蘭陀文字なり。五六年前紅毛人旅中ここに歿す、これも東海道のうちにしてはめずらし。」¹⁸と記す。その文章に添えられた挿絵(図2)を掲げる。あわせて現在の墓所の造り(写真1・2)と比べていただきたい。玉垣の形は現在のものと違っていることが注目される。まず玉垣の設置位置である。絵図では玉垣の欄干は墓碑を載せた石垣を巡らす台座の外側を方形に巡り、高さも墓碑の高さより低く描かれている。これに対して現在の玉垣はこの石垣台座上のへりにめぐっているの、墓碑の

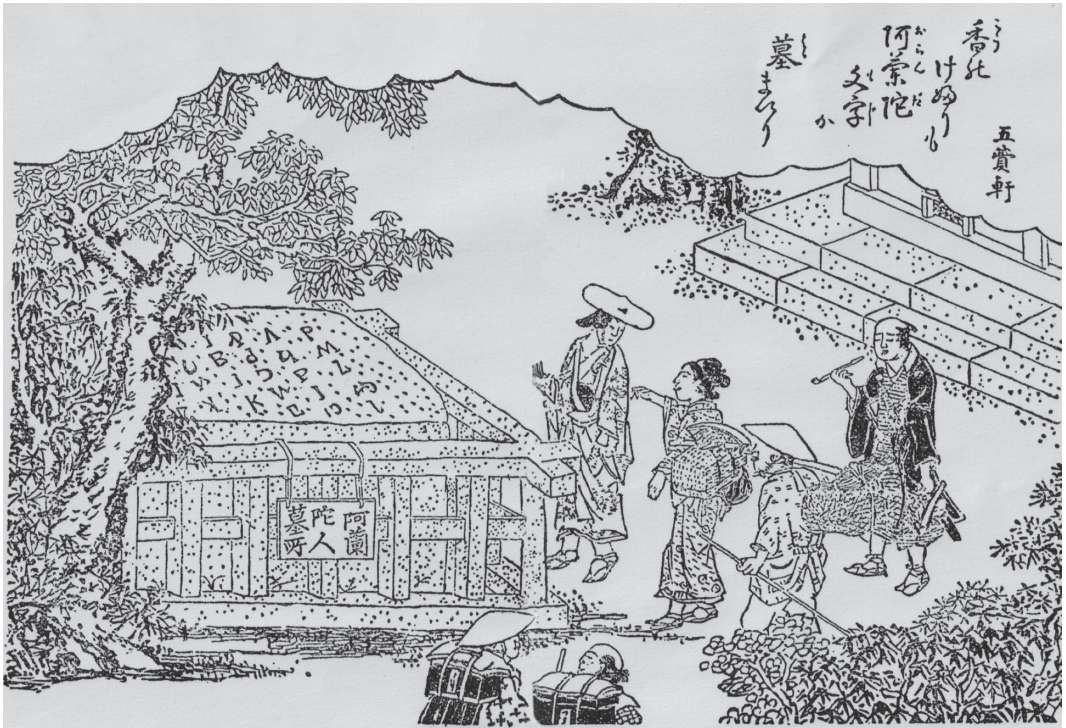


図2 阿蘭陀人墓所の絵図 (1802年 曲亭馬琴の挿絵)

高さよりはるかに高くなっている。また馬琴の挿絵では、玉垣の柱の上部に横木が載せられ、長辺と短辺の交点に十字が突出する。現在の玉垣は柱の上部に横木はなく角柱の頭部は四角錐状をなしている。また柱と柱を安定させるため左右にほぞを抜いて通す断面長方形の横木も、馬琴の絵図では一条だが、現在の玉垣では二条である。「施主大通辞某の姓名を刻す」とあるが、現在の玉垣にはその銘はない。墓碑設置間もなく書かれた馬琴の

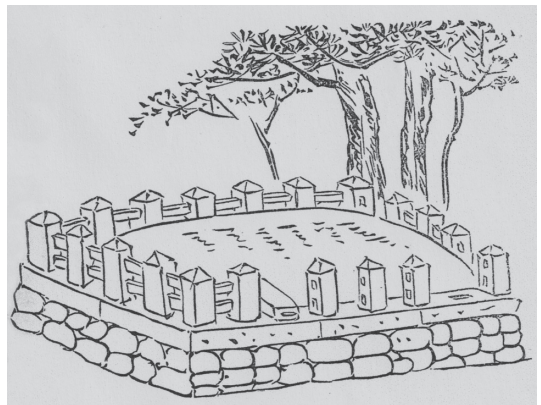


図3 1916年の鈴木正鍊のスケッチ

絵図は、彼自身の紀行文であり実際にみているので信憑性は高く、描かれた形が現在のものと異なっているので、馬琴以後どこかの時点で現在の形に改修されたことを物語っている。

1916(大正5)年発表の鈴木正鍊「天然寺蘭人の墓碑」論文掲載の当時のスケッチ(図3)は現在の玉垣と同じ形であるから、その改修が行われたのは、遅くとも1916(大正5)年をさかのぼる。沼田次郎氏が引用する¹⁹オランダ商館長ジャン・ブロンホフの商館長日記1822(文政5)と天然寺所蔵文書によれば、この年江戸参府の帰りに墓参のために掛川天然寺に立ち寄ったオランダ商館長ジャン・ブロンホフは天然寺の寺僧と交渉して、今後25年間寄進を行う代わりに①寺僧は

墓所を清掃して奇麗を維持すること。②に墓所の周囲の玉垣は新しく高くすることが取り決められた。その後1925(大正14)年オランダ大使館の援助をえて、墓碑の修繕と記念碑の建設が行われているが、墓碑周囲の玉垣の設計変更を行うものではなかったことは1916(大正5)年の鈴木正鍊のスケッチ(図3)と現在の墓所(図1)が異なるものでないことから明らかである。

したがって現在みられる形への墓所の改修は1822(文政5)年のオランダ商館との寄進契約にもとづいて、そのころおこなわれたものと推定される。

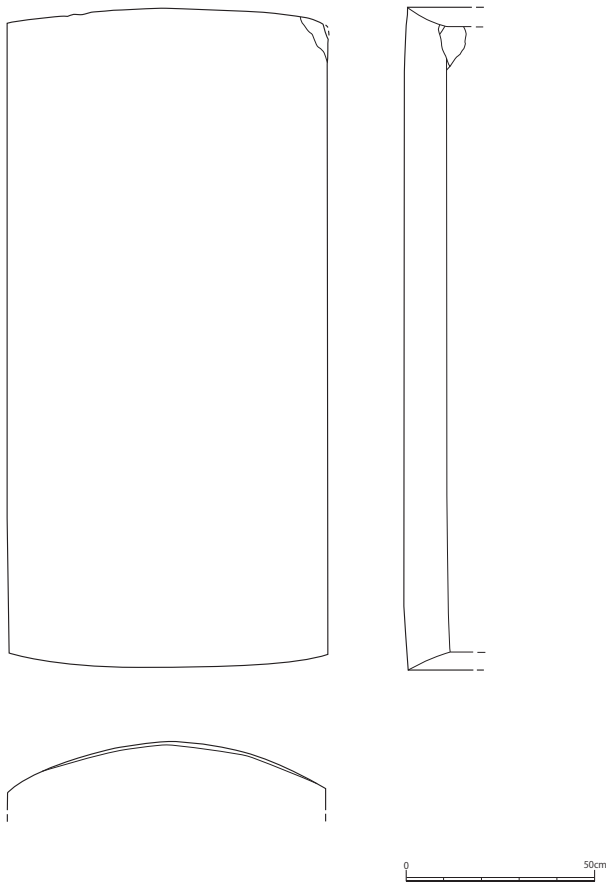


図4 ヘンミ墓の実測図(20分の1)



この地下静座の体あり、敬うべし尊ぶべし、名を「ゲイスベルトヘムミ」先生と称する君の生を終わりたる所なり。先生存命のあいだ、職にあつて主ところは日本国交商の大商官と鑿舶師を撰りたり。わが紀元1798年6月8日往生而葬之。

(天然寺保存訳文より)

田中注：葬られたのは6月9日と記す。

図5 ヘンミ墓の銘文

墓所・墓石と碑文

ヘンミイの墓石本体はかなり風化が進んでいるが製作当初の形を留めている。現在は高さ 50cm ほどの石垣を巡らした方形の台座の中央に長方形の扁平形板状伏碑をおき、周囲に一重の玉垣を巡らしている。玉垣は四隅に大型の方柱形の石材を立て、その間に長辺 5 本短辺 3 本の小型の方柱形の石材を配置し、角柱を固定するために 2 本の断面長方形の石材を横に通すため穿孔をおこなっている。墓碑本体は長さ 175cm、幅 84cm、高さは小口中央で 17cm、小口両端で 7センチである。高さは埋没しているため正確に計測できないが、指定時の図から見るとさらに数cmほど高くなるようである。形式は扁平形板状伏碑の A1 式の変形である。両小口の平面形が緩く弧を描くように作られている点が通常の形式と異なっている。背面にオランダ語の銘文が彫られ、文様等はない。石材は黄土色を帯びた安山岩系統の石である。玉垣と同じ地元の石材が利用されている。墓碑銘は図 5 の通り、同一の縦幅 16 行にアルファベットの大字で刻まれ、碑面の実際は単語のあいだに空白をつくらずよみづらい。もちろんオランダ語で書かれているが、文字は細い薬研堀で、その刻字の特徴は長方形の枠の中に左右が均等になるように文字の横幅を調整して刻んでいる点にある。これは同時代の長崎のオランダ人墓地が、行ごとに文字の大きさを変えたり、行の幅が異なって配列されている点と、大きく異なっており（図 6）、先に指摘した平面形態の微妙な食い違いとともに、長崎のオランダ人墓碑と異なる点である。注文をうけた地元の石工の工夫の可能性が高い。

墓の特徴は、①墓石の周囲に玉垣がもうけられていること。②日本式の立碑ではなく、本来日本にはない形式の伏碑という形態をとっていること。③銘文にキリスト教紀元の西暦が記されていることである。

天然寺所蔵史料とオランダ商館長日記

天然寺にはヘンミイの葬儀に関する文書が残っており、すでに沼田次郎によって詳細に紹介されている²⁰。同時にヘンミイの死に至る経過と葬儀の模様を記録したレオポルド・ウィレム・ラスの参府日記の紹介も庄司三男によって行われている²¹。双方の史料を対照すると、1798 年 6 月 8 日午後 11 時（ラス日記）＝寛政 10 年 4 月 23 日暮れ六つ半（午後 9 時頃）（日本史料とオランダ史料では死亡日時が 1 日と 2 時間ほど食い違い、日本史料が 1 日古い）、半年来患っていた胃病にてヘンミイは掛川宿本陣にて死去²²する。その内容は一致する。天然寺史料では翌寛政 10 年 4 月 24 日夜八つ時（午前 2 時過ぎ）天然寺から病死の届け出があり、長崎奉行の依頼により、4 月 25 日四つ（午前 10 時）から天然寺で葬式がおこなわれたとするが、葬儀の日付と開始時刻はラス日記の 6 月 9 日と天然寺史料の 4 月 25 日（午前 10 時）とが一致している。葬式は仏僧 7 名の仏式によって行われ、戒名は「通達法善居士」とつけられ、その戒名を書いた位牌が現在も天然寺にまつられている。葬儀の費用は長崎奉行所が負担したことが日本側史料からわかる。墓所については死去の前日の 4 月 22 日に随行していた長崎奉行所の勘定役島山東十郎から、一書をもって万一甲必丹死亡の場合には天然寺に土葬せられんことの依頼があり、天然寺もただちに掛川奉行福島友大夫に報告し

ている。ラス日記によれば、死去した8日同日に「上医といっしょに亡骸を移し、明日その亡骸を埋葬することになっている寺へ運べるように乗り物を安置した。なお墓のための棺と墓石を直ちに準備させた。」とあり、葬儀の翌日10日早朝に掛川を出発する際ラスは「大通詞と宿の主人を呼び寄せ、墓地に建てる墓石が出来上がり次第、それを適当な場所に立てることを世話してくれるよう最後の依頼をした。」と記しており、ヘンミイ葬儀の前後2.3日の間にあわただしく墓碑の注文が行われて、その設置をみずにオランダ商館一行は掛川を立ち去ったのである。

ラス日記を信じると6月8日夜遅くに亡くなったヘンミイの葬式は翌日9日午前10時から行われたことになり、その間に葬式の段取りや墓所の設定、墓石の注文が行われたことになる。墓石だけを見ても銘文の選定や、日本人通詞による検閲(キリスト教に関わる文言の削除)などが当然行われるし、墓石の型式なども長崎での先例にてらして長崎奉行所の了解のもとに行われるのであるから、夜中のうちに行くことは無理があり、ヘンミイの死から葬儀にいたる日程は日本側の4月23日(6月7日)死去、24日(8日)準備、25日(9日)葬儀という日どりの方が正しいと考えられる。こうしてヘンミイ墓所は葬儀後それほど間を置かず、葬儀の際の注文のままに設置されたことが判明する。

以上の史料から判ったことを整理すると①葬儀と埋葬はヘンミイが没した掛川で行われている。長崎におけるオランダ人の「菩提寺」である悟真寺やその墓所に葬られることはなかった。②葬儀は天然寺において仏教式に行われ戒名・位牌もともなった。③墓石はその場で注文され速やかに建てられている。後になって建てられたものではない。

4、ヘンミイ墓の前例とその意義

静岡県掛川市に所在する18世紀末のオランダ商館長ゲイスベルト・ヘンミイ墓所について、墓石自体の考古学的な観察と文献史料を紹介してきたが、そこで明らかになった事実について説明しておきたい。

ヘンミイはなぜ掛川に葬られたのか。

江戸時代、長崎出島のオランダ商館員が死亡した場合、長崎西郊外の稲佐にある浄土宗寺院悟真寺の管理する墓地に葬られるようになっていた。ヘンミイ以前にも1778(天明8)年任地長崎に向かう途上、東シナ海の海上で死亡した商館長ヘンドリック・デュルコープの墓地(図6)もそこにある。いっぽう江戸参府の際に亡くなった場合には、庄司三男がひく²³ 1850(嘉永3)年編纂の『通航一覽』巻241の「参府道中にて、かれもし死去すれば其所に埋葬す」²⁴から推して、死去した場所で埋葬する慣例が成立していたものと考えられる。ちなみに江戸で亡くなった場合は浅草磯多村の浅草寺に、京の場合は真如堂東陽院に葬られた例がある²⁵。このような慣行の下に同行していた通詞を含む長崎奉行所役人によってその前例に従って、ヘンミイは死去した掛川で埋葬されることになったと考えられる。ではなぜ仏教寺院天然寺において埋葬及び葬儀が執り行われたのだろうか。

ヘンミンはなぜ仏式で葬られたのか

ヘンミイの葬儀は1798年6月9日＝寛政10年4月25日の掛川の浄土宗寺院天然寺で行われた。その際亡骸は納棺して、そこで僧の検視を受けたうえで寺院に運ばれたのち、7名の僧侶による葬儀がオランダ商館員と大通詞など長崎奉行所役人出席のもと執り行われ、即日天然寺に埋葬されている²⁶。この決定はオランダ商館員の了解のもとに、随行していた長崎奉行所手付役福村直右衛門によって行われていることがわかっている。どうしてオランダ人に対して僧侶による検視と、葬式が行われたのだろうか。まず死者を検視することは、当時切支丹類族の制度に準じて行われたものと考えられる。オランダ人がキリスト教徒すなわち切支丹であることは当時周知のことであり、死者が埋葬に際してキリスト教の道具を持っていないかを検視するのが類族における検視である。17世紀の末に制度化された切支丹類族は、まだこの時代まで全国的に5世の子孫が生存しており、身近な制度であったはずである。この制度が準用されたものと考えられる。ヘンミイはキリスト教の新教徒である。1609（慶長14）年に日本に商館を開設して以来、オランダ人がキリスト教徒であることは幕府には知られていた事実であり、常に幕府からの問いかけに対して、オランダ人自身もキリスト教徒であると答え、幕府もそうとして扱ってきた、それゆえキリスト教に関係する行事習俗を日本国内で行うことは厳密に禁止され、オランダ人自身も自覚して統制した。したがって彼らもキリスト教に関わる道具は参府に当たって持参していなかったし、たとえあったとしても表ざたにならなかったであろう。

また商館長のヘンミイが仏教式に葬式を挙げる前例は1778（天明8）年に長崎稲佐悟真寺に葬られた商館長デュルコープの例がある。おそらくさらにさかのぼってオランダ商館員あるいは長崎寄港中のオランダ船員の埋葬が仏教式に行われるようになるのは、17世紀中葉の承応年間であろうと考えられる。もともと1609（慶長14）年から1641（寛永18）年にいたる平戸商館時代には、オランダ人は松浦沿海の横島に牧場と墓地をもち、商館においてキリスト教の葬式をおこなったうえで横島に埋葬されていたと推定されている²⁷。1641（寛永18）年に平戸から長崎へ商館が移転を強制されて以後、幕府はキリスト教徒の埋葬を禁じる切支丹政策をオランダ人にも適用し、オランダ人が長崎港内の小島に墓地を希望したにも関わらず、それを禁止し長崎沖での水葬を命じた。陸上に埋葬が許可されるのは13年後の1654（承応3）年に稲佐悟真寺の墓地への埋葬からである。このようなオランダ人の陸上埋葬の許可が下り埋葬地が悟真寺に決定した背景には、悟真寺がすでに長崎に来航する唐人の墓地としてもっとも多く利用していたこともあるが、おそらく悟真寺僧侶による仏教式葬儀をおこなうことが、陸上埋葬の条件として提示され、オランダ人側はそれを受け入れたものであると推定される。したがってヘンミイが天然寺で仏教式の葬式をもって埋葬されることは、長崎での悟真寺による埋葬形式を前例としたものと考えられる。



図6 デュルコーブ墓（拓本は、大石一久氏による）

ヘンミイ墓の形態

ヘンミイ墓は、その形態が長崎悟真寺の1778(安永7)年のデュルコーブ墓と1787(天明7)年のファン・トリートの墓碑の形態と一致するので、商館長の墓碑としてはデュルコーブ墓の先例に従って、製作されたものと考えられる。埋葬から葬儀までの一切が随行の長崎奉行所役人によって行われたように、墓碑の形式の決定は、先例をつくった長崎奉行所の意向によるものと推定される。デュルコーブからヘンミイにいたる3名の墓碑銘にはオランダ人の宗教的な表現がなく、当然ながらオランダ通詞による検閲をうけたものと考えられる。墓碑の形態に関しては、平面形において小口面が直線的ではなく膨らんでいる点と、文字の配置が長方形の枠いっぱいに配置される点に特色があることを指摘したが、これは墓碑の製作を請け負った地元の石工が長崎の実例

を知らなかったことによるもので、長崎奉行所のメモのような見取り図と銘文を書いた文書をわたされ、口頭で指令されたために生じた製作時の変容と考えられる。

ヘンミン墓にはなぜ玉垣があるのか

現在知られている長崎悟真寺のオランダ人墓地には、墓碑の個々に対して玉垣は存在せず、またかつて存在したという兆候もない。その意味では玉垣はオランダ人の要望によるものではなく、長崎奉行所もそのような前例がないから、彼らが発意したとも考えられない。馬琴の随筆にある「四方に石垣をして施主大通辞某の姓名を刻す。」という記載から、墓所を管理する掛川側の要望をいれて、同行した大通詞中山作三郎が寄進したものであろうか。そういう意味でこの掛川のヘンミイ墓の玉垣は地元で配慮した特例であると考えられる。玉垣が本来聖なる空間を外部の俗なる空間と分ける意識をもって作られたとすれば、キリスト教徒である外国人の埋葬地を、外部のキリシタンのいない世界と区別するための意識的な境界として設けられた可能性がある。今のところ前例は知られていないが、そのうち幕末の1954（嘉永6）年にペリー艦隊の最初の使者の埋葬が行われた横浜村増徳院において、ペリー艦隊が持ち込んだ木製墓標の周りに竹の柵がめぐらされた例²⁸があり、外国人特にキリスト教徒の埋葬の周囲に柵をつくって結界し、その埋葬を観念の上で国内から分離する象徴操作が行われている。おそらくヘンミイ墓の玉垣も、結界することで、キリスト教徒の死者の空間を日本人の生活空間から分離する、観念上の行為をおこなったものとかんがえられ、外国人と共存する長崎ではこのような例がなく、外国人と接することが極めてまれだった掛川や横浜のような東国で、結界を結ぶという象徴的行為が行われたことは興味深い。

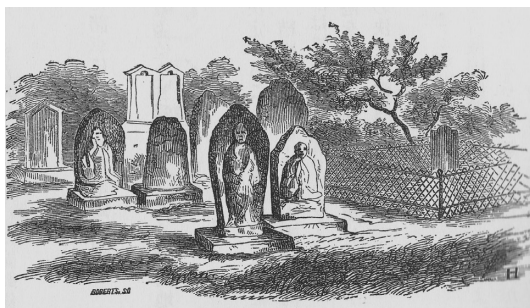


図7 横浜村増徳院の墓地

謝辞

天然寺のみなさま、現地調査に同行していただいた山本哲也氏（現大分県立埋蔵文化財センター）、指定時の調査資料を提供していただいた掛川市の文化財担当係、論文書籍探索に協力いただいた大分県立図書館図書館および別府大学附属図書館の司書の皆さんに特に感謝します。

[註]

- (1) 悟真寺は長崎の町から浦上川を隔てた対岸の稲佐に所在し、行政区画としては浦上瀬村に属することから、厳密に言えば当時の長崎町内に作られた寺院ではない。
- (2) そのほかにも 1860 年代の 10 年間に限ってだが長崎外国人居留地の墓地があり、様々な欧米人の墓がある。悟真寺の墓地については以下の調査概報を参照のこと。

田中裕介編 2014 『キリシタン墓と中国人墓にみる大航海時代の外来墓制に関する基礎的研究』(科研費報告書) 別府大学文学部 p17～25

田中裕介編 2017 『日本近世における外来系墓碑の変容過程に関する実証的研究』(科研費報告書) 別府大学文学部 p70～79
- (3) 田中裕介 2012 「日本における 16・17 世紀キリシタン墓碑の形式と分類」『日本キリシタン墓碑総覧』 p389～406 南島原市教育委員会および長崎文献社刊行
- (4) 『日本随筆大成』新装版 第1期10巻、1975 p310～313 吉川弘文館
馬琴の紀行文への挿絵と現在の墓碑廻りの玉垣の形態が異なっていることに注目。後述。
- (5) 『百卅年忌記念 鈴木胤』1967、p180 鈴木胤顕彰会 国立国会図書館デジタルアーカイブスより。
- (6) 『掛川誌稿 全』1972 名著出版 国立国会図書館デジタルアーカイブスより。
- (7) 沼田次郎 1966 「天然寺所蔵和蘭甲必丹ヘンミイ関係資料」『歴史地理』91-3、p42 日本歴史地理研究会
- (8) 鈴木正鍊 1916 「天然寺蘭人の墓碑」『歴史地理』28-5、p177～181 日本歴史地理研究会
(鈴木正鍊は当時静岡県立掛川中学校教諭)
- (9) 若森英雄 1954 「ゲイスベルト・ヘムミ先生」『江戸長崎談叢』2号、p10～12 龍船堂
- (10) 庄司三男 1962 「和蘭商館長ヘースベルト・ヘンミー」『蘭学資料研究会研究報告』p1～23 蘭学資料研究会
- (11) 庄司三男 1962 「仏寺に葬られた蘭人の一例」『日本仏教』15、p19～22 日本仏教研究会
- (12) 沼田 註7文献
- (13) 宮永孝 1989 「日本におけるオランダ人墓」『社会労働研究』35-2、p89～218 法政大学社会学部学会
- (14) 宮永孝 1992 『幕末維新阿蘭陀異聞』(第3章日本に眠るオランダ人) p141～242 日本経済評論社
- (15) 『日本歴史地名体系 22 巻 静岡県の地名』2000、p866 平凡社
- (16) 庄司 註10文献
- (17) 馬琴の紀行文「著作堂一夕話」の挿図(『日本随筆大成』新装版 第1期10巻 1975、p312～313)では、1802(享和2)年当時は堂宇がそばに描かれているので、境内に位置していたようにも見える。
- (18) 註4文献 p311
- (19) 沼田 註7文献 p43
- (20) 沼田 註7文献
- (21) 庄司 註11文献 p19～20

- (22) 庄司三男 1962 「和蘭商館長ヘースベルト・ヘンミー」『蘭学資料研究会研究報告』118, p1～23 蘭学資料研究会
ヘンミイの死因については薩摩との密貿易に起因する毒死説もあったが、庄司氏によるオランダ商館長日記の
詳細な検討により病死説が有力となった。
- (23) 庄司 註11 文献 p19
- (24) 『通航一覧』巻241、1913 p210 国書刊行会
- (25) 宮永 註13 文献文末のオランダ人埋葬者一覧表
- (26) 庄司 註11 文献 p20
- (27) 庄司三男 1967 「元禄宝永前後における長崎の唐人およびオランダ人と仏寺との関係について」『日本仏教』25、
p20 日本仏教研究会
- (28) オフィス宮崎編訳 2009 『ペリー艦隊日本遠征記』、p195 万来社